

時代を越えて生きるために ——著者、読者および図書館の責任

1750年にジュネーヴの一市民であったジャン＝ジャック・ルソーは、ディジョンのアカデミーが提示した「学問と芸術の復興は習俗の純化に寄与したか」という課題に対して、「ヨーロッパのもっとも学識ある学会をまえにして学問を非難し、高名なアカデミーにおいて無知を称賛し、学問研究に対する侮蔑と、真実の学者に対する尊敬を両立させること」を目的にした論文を提出した。この懸賞論文は見事に当選し、後にルソーの第1論攷『学問芸術論』として広くヨーロッパを中心に読まれるようになった。

しかし、これを執筆中のルソーは、近代文明に対する激しい批判を展開する彼の著述が大方の審査委員や一般の読者によっては歓迎されないだろうと予想していた。そのことは『学問芸術論』の次の節がはっきり示している：

「今日において、およそ人びとの称賛の的となっているものに正面から反対するならば、私はあらゆる非難を受けるだけであろう。いくらかの識者によって認められる光栄に浴したとしても、一般の賛同を期待すべきではない。・・・才人たちや流行の先端をいく人びとに気に入られようとは思わない。いつの時代においても、その時代、国、社会の意見に従うように作られた人間がいる。・・・みずからの時代を越えて生きようとするならば、こうした読者のために書いてはならない。」

ここでルソーが著者と読者に関して「みずからの時代に阿る著者と、みずからの時代を越えて生きようとする著者」vs.「みずからの時代の意見に従う読者と、みずからの時代を越えて生きようとする読者」のようにそれぞれ2種類の大別を含意しているが、これは注目すべき点である。みずからの時代を越えて生きよう、すなわち、著述しよう（読まれよう）とするルソーの一縷の望みは、みずからの時代を越えて生きようとする読者、すなわち、過去の著者から学ぼう、過去の著者を読もうとする読者の出現あるいは存続に懸かっているのである。そのような読者は、どこに、どれほど多く存在したのか、存在するのか、そして存在し続けるのか？

15世紀後半から16世紀前半のルネッサンス期イタリアで活躍したニコロ・マキアヴェッリはまさしくみずからの時代を越えて読書しかつ著述した哲学者であった。1513年12月10日の友人フランチェスコ・ヴェットリー宛の非常に有名な書簡の中で、マキアヴェッリは読書という手段を介した古代人たちとの彼の会話を美しく叙述している。



図書館長
飯島 昇藏

「晩になると、私は家に帰って私の書斎に入ります。入り口のところで泥や汚れにまみれた普段着を脱ぎ、王や宮廷にふさわしい衣服を身に着けます；そして適切に着替えると、私は古代の男たちの古代の宮廷に入っていく、そこで彼らに愛情をもって迎えられる。そこで、私だけのものであり、そのためにこそ私が生まれてきた、あの食事を食します；そこで私は恥じることなく彼らと語り合い、彼らの行為の理由について彼らに訊ねます；すると彼らは彼らの人間性を通じて(per loro humanità)私に伝えてくれます；こうして4時間もの間、私は何ら退屈も感じず、あらゆる心配事も忘れ、貧窮も怖れず、死に失望することもあります：完全に私自身を彼らのうちに譲渡してしまうのです。」(飯島昇藏・厚見恵一郎訳)

聞いたことも覚えていなければ知識を産み出すことにはならないというダンテの言葉に従いつつ、マキアヴェッリは彼らとの会話から彼にとって利益となったあらゆる事柄をノートに取り、それらを名著『君主論』の中に活用していった。彼が優れた読書家であっただけでなく、卓越した著述家であったことを、彼の著作が、時代と国と言語を越えて、思考する人びとによって真剣に読みつがれ、やがてまもなくその思想が誰からもMachiavellianismと呼ばれるようになった事実以上に雄弁に物語るものはないであろう。

図書館には古今東西の賢者たちの著作が豊富に収蔵されているが、現代(と未来)の読者によって読まれつづけなければ何の価値もないと言っても過言ではない。それらの多くは単に歴史的に、すなわち、著者の時代にとってのみ価値がある書物として書かれたのではなく、文字通り時代を越えて、永遠に、普遍的に読まれるべきものとして書かれたのである。時代を越えて生きようとする著者に対しては、時代を越えて生き、知恵を学ぼうとする読者が応答しなければならない。翻って、大学の図書館はマキアヴェッリの書斎のような時間と空間を超えた学生たちの学びの場、読書の場でありえているのであろうか。蔵書のあり方ひとつをとっても、図書館は、時代を超越しようとする著者と読者との出会いを支えてゆく重大な役割と責任を果たしていかなければならないのである。

いずれにしても、ひとたび著書が著された後には、知恵の伝達はひとえにその本を読みうる読者の側にのみ責任があるのである。まさにこの意味においても「知恵の何たるかを読むことによって学べ」という大カトーの格言は今に生き続けている、すなわち、真理である。図書館の使命はそのような読書を全力で支援していくことに尽きる。

参考文献

- ジャン＝ジャック・ルソー『学問芸術論』
山路昭訳『ルソー全集』第4巻(白水社、1978年)
- 『マキアヴェッリ全集』(筑摩書房、1998-2002年)
- レオ・シュトラウス『哲学者マキアヴェッリについて』
飯島・厚見・村田訳(勁草書房、2011年)